

地図作りのキーパーソン



5

安藤由紀子

忠敬が地図作りを進める上でのキーパーソンは、二番目の妻ノブの父で仙台藩医桑原隆朝ではないか、と私は目をつけた。理由は寛政七年(一七九五年)に忠敬をめぐって、いろいろなことが連なっていることによる。

その年三月にノブが亡くなり、同月、若年寄堀田親津守正致が大阪の天文暦学者、麻田剛立の二人の高弟高橋全時・間重富に江戸出府を命じ、五月に至時だけ幕府天文方に入り、同月忠敬隠居、出府、直ちに至時に入門、六月重富天文方入り、と続く。

下男でも紹介状が必要だった時代に、至時への入門の紹介者はいつも伏せられている。

ただ、大谷亮吉著「伊能忠敬」に「岳父桑原はその職業上幕府頼官の門に出入りし面識の士多く、蝦夷地測量に際し当局者の意向を察知して忠敬のために有力な顧問となり……」とあったため、桑原隆朝以外に紹介者は考えられないと思っただけである。

仙台藩の資料によれば、桑原は

藩主一族を診察する上級の医師、御近習(注1)で四白石江戸づめ、多病につき宿直免除、邸内

藩主一族を診察する上級の医師、御近習(注1)で四白石江戸づめ、多病につき宿直免除、邸内

藩医の「情報網」を駆使 義父が手厚く測量支援

輿に乗ることを許され、藩の舁の外に住むことも許された有力者であることがわかった。舁の外に住む藩医は、藩の数二百七十として五百人以上はいはずで、医者として、大藩や旗本、裕福な町人の家にも入り込め、独特の情報ネットワークを持っていた。

大槻玄沢、杉田玄門、中川淳庵、前野良沢など教えれば切りが無く、彼らを中心に出口の雑多な自由な知識人が集まり、江戸・大阪では身分の障壁が次第に乗り越えられつつあった。娘ノブの夫忠敬が地図作りの夢を抱き、隠居して江戸に出て来

た。情報ネットワークのある桑原が「一肌腕ころ」と思っても不思議はない。



「蝦夷地測量に際し……有力な顧問となり」とはころだ。

第一、第二次測量の出発前にトランプルがあった。幕府と至時・重富・忠敬トリオでは、その目的に

大きな違いがあったからだ。幕府にはロシアの南下という差し迫った問題があって、蝦夷地を直轄とし、その正確な地図がどうしても必要だった。一方、天文方トリオは蝦夷地までの正確な距離を知り、北極星の高度の差を求めて、緯度一度に相当する地表の距離を確定したかった。

測量が大きく重いので、運び入

足が調達できず、幕府は船で行かせようとした。船で運ばれては困るトリオは、「海上からでは距離が正確に測れない」とか、「伊能は船に弱い」とか申し立て幕府側の出方をうかがっている。

交渉が行き詰まった時、忠敬が訪ねるのは決まって桑原家である。桑原は「蝦夷地の件は、お上

ではもうお決まりになっています」「書類にして持っただけでいい。ご内覧の機会もあるでしょう」などと情報や助言を与えている。しかし、桑原が交渉した大物の名は、わざと伏せられている。



その大物とはだれだろう。天文方の支配は若年寄であり、伊能測量の間中この職にあったのは堀田正致であった。おまけに彼は、六代伊達藩主宗村の八男で近江堅田の堀田家へ養子に入った人であった。桑原と仙台でつながるではないか。

文化四年(一八〇七年)、第六次測量出発前、佐原の協力者大川治兵衛にあてた忠敬の書簡が早稲田大学図書館にある。「今、堀田摂津守様等、蝦夷地へご出立で、仙台へ五百人秋田へ三百人出兵が命じられました」とあり、忠敬がいかに堀田に近かったか、また出兵の数まで知っているのに驚かされる。

桑原からの情報であることは自明である。桑原の長男如則と大槻玄沢の長男玄幹が堀田正致に随行しているからである。

測量が幕府御用であることを周知させるためにつくられたのほりの「御用旗」(複製) 佐原市の伊能忠敬記念館で



(注1) 注君の側近にいて奉仕する役。